

優秀賞

僕が母になった日のこと

青森県 十和田市立四和中学校三年 舛館 優斗

僕の家では牛を飼っています。去年の七月、僕の家で一匹の子牛が生まれました。牛の出産はほとんど夜中の時間帯にあります。この子牛もそうでした。

母牛は、長い時間苦しうにしています。子牛がなかなか出てこないのです。母牛はどんどん弱ってきます。このままでは母牛も子牛も死んでしまうので、僕とおじいちゃん子牛の前足をひっぱり、なんとか子牛が生まれました。生まれた頃には朝になっていました。ところが、事情があつてこの子牛を僕が自分の手で育てることになりました。僕の家では牛はペットではありません。大きくなったら売られてしまうので必ず別れが来ます。その別れの時まで、僕は一生懸命育てました。

その事情というのは、母牛の体調が生んだ後から急に悪くなったことです。えさも食べないので、母乳ができません。でも、子牛に母乳をあげないと死ん

でしまいます。だから、僕は子牛の様子を見て、だいたい三〜四時間おきにミルクを飲ませました。毎日、夜中も起きて飲ませました。

五ヶ月がたち、子牛は大きくなりました。ここまできるとミルクは終わって、エサを食べさせます。子牛は僕によくついてくれました。だから、僕は牛に名前をつけました。その名前はひみつです。ペットじゃないので本当は名前をつけるのはだめですが、僕はそのひみつの名前をよんでエサをあげました。そうすると、子牛はよくエサを食べてくれました。僕を母だと思っているようです。そして、子牛がエサを食べられるようになった直後、母牛は病気で死んでしまいました。子牛はどうしているだろうと見に行くと、目から涙を流して泣いています。そして、ロープをかじってにげて、母牛の所へ行ったのです。もうすでに死んでいるのに、母の顔をな

めて甘えていました。「やっぱり母には勝てないな。本当はいつもそうやって甘えたかったんだろうな」と思い、しばらくそのまま母のそばにおいてあげました。

そして、ハケ月がたち、大きな角もはえて子牛はどうとう大人になりました。夜中も起きてミルクをあげたり、体調を見てエサの量や、種類を変えたり、母が死んで泣いている牛の顔をふいたり、ざらざらとした舌でなめて甘えてくるのをだまって許してやったり。そんな日々をいっしょに乗り越えて大きくなってくれたことがとてもうれしいです。僕も勉強になったし、牛を好きになって本当によかったと思います。

みなさんは、牛肉が好きですか。牛丼、すき焼き、ステーキ、焼き肉など、牛肉の料理はたくさんの方が好きだと思います。みなさんにはぜひ、牛肉を食べる時に、「幸せだな」「ありがとう」と思ってほしいです。そして、残さずおいしく食べてくれると、僕たち酪農家もうれしいし、牛たちの命もうれしいと思います。

